

東京歌会（第八十八回）

二〇二〇年二月二十日（木）、会場：文京区立アカデミー向丘二階和室。詠草は各二首八首。出席者三名（小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

路地に入り角を曲ればひともの紅梅ほころび闇にただよう

市川茂子

いつものというほどの路地。夕ぐれだろうか。紅梅は既知。帰宅の路地、夜でもあることが一首目にある。四句八音。（紅梅）ほころび闇にただよう、のは開花し、その香りがというようなことか。闇にただよう、がいいという。

すがすがとメタセコイアは天に伸び付度など無き直ぐなる形象かたち

林 博子

付度などなき、を、直ぐなる、につなげている。付度など無き、は今の時代性でもある。直ぐなる、と単純化して云った。メタセコイアの和名はアケボノスギ（曙杉）。北半球で化石として知られていたが、中国奥地で原生種が発見されて以来世界各地で栽培されているという（『新明解国語辞典』第五版）。メタセコイアがいろいろ話題になった。すがすがと、は清々と。三句で、天に伸び、と切ってもいい。

演奏会の果てて若き歌手言へり「なま暖かく見守ってください」

布宮慈子

ここで、なま暖かく、に作者は戸惑っている。この言い方はどう流通しているのか。こういうことではないのか。ここでは、若き（歌手）がかなめ。面白がっていない。

水やりをしているだけと云う女性ひとの庭に一つまた花の名を聞く

小野澤繁雄

庭でいろいろ草木の世話をしている女性。水やりをしているだけ、は謙遜か。その人に花の名を聞いたことがある。きょうまた花が眼に止まり、その花の名を聞いている。わかりやすいやりとりがある。

（報告：小野澤繁雄）